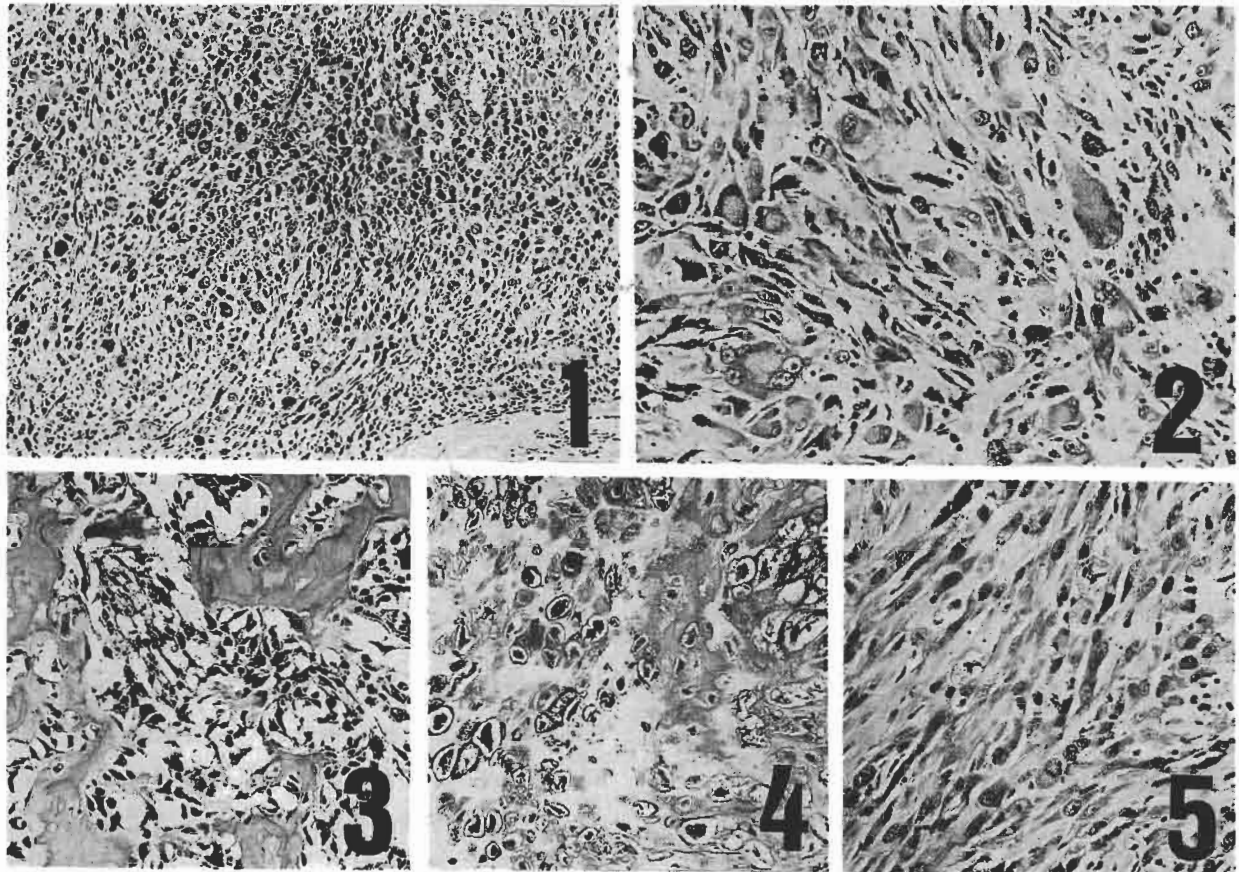


# 犬の背部皮下腫瘍

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第34回獣医病理学研修会標本No.613



**動物：**犬，シェットランド・シープドッグ，雌，8歳。

**臨床事項：**1年ほど前からあった腹部背側の皮下腫瘍が最近大きくなったと某動物病院に来院，腫瘍（提出標本A）を摘出した。手術後約10週で同部位皮下に2つの腫瘍が再発（提出標本B），再び外科的に切除した。

**肉眼所見：**原発腫瘍は大きさ5×4×3.5cm，硬結感のある分葉状乳白色腫瘍で，肉眼的に骨や軟骨の形成，壊死などが観察された。これに対し再発腫瘍は，直径約5mm大と1cm大の2つで，いずれも乳白色の境界不明瞭な皮下腫瘍であった。

**組織所見：**原発腫瘍である標本Aでは，やや大型の好酸性異型細胞の浸潤性増殖がみられた（写真1，HE）。それらの細胞は，多形な核と好酸性のやや広い不定形細胞質を持ち，中には多核のものや，ラケット状の細胞質を持つものなどがあり，強い異型を示した（写真2，HE）。これら腫瘍細胞は，渡辺鍍銀染色で箱入り像を示し，マッソントリクローム染色で細胞質は赤染し，酵素抗体ABC法でミオグロビン陽性を示した。また同一腫瘍組織内に骨肉腫（写真3，HE），軟骨肉腫（写真4，HE），線

維肉腫及び明らかな分化傾向を示さない未分化肉腫の部位も観察された。再発腫瘍である標本Bでは，上述の横紋筋肉腫類似の紡錘型細胞の増殖があり，核分裂像や異常核分裂像も多数認められ，増殖が盛んな悪性腫瘍細胞と考えられた（写真5，HE）。また，腫瘍細胞の細胞質は酵素抗体ABC法でミオグロビン弱陽性を示した。

**考察：**以上の所見から，原発腫瘍は悪性間葉腫，再発腫瘍は横紋筋肉腫と診断した。現在まで文献的に，犬の悪性間葉腫は9例の報告があり，その原発部位は骨が多く4例，次いで肝臓が2例，腸管，後腹膜，頸部がそれぞれ1例で腹部皮下の報告はない。またこれらのうち6例で肺あるいは肝臓への転移が確認されているが，転移先での組織像はまちまちで，同一症例でも転移臓器によって異なる腫瘍が確認された例もある。本症例では現在までのところ臨床的には転移は確認されておらず，腫瘍の発生部位及び生物学的挙動について稀な症例と考えられた。

**総合診断：**犬の皮下に発生した悪性間葉腫と横紋筋肉腫の再発。